

昭和12年3月1日（月）

朝より曇り、降雨。唐日新聞に二月は僅かに七日間、五、六、九、十、十六、十七、十九晴天。十五日は冬らしき降雪、其の他は梅雨時に見る如き鬱陶敷き細雨なりしとあり。十二年度帝国予算、二十八億千五百余万円。保険部責任数完成したる由にて、本日祝賀宴を開催したき旨申出あり。時節柄とて、会合は警察の届出を要するやにて、夫れ程までして催す必要もなかるべきも、思い立ちしやに付き承認せり。黒岩君も招待に応じて来局せり。余は五時半飯る。風呂沸かす、髯剃る。満州建国五周年、皇統継承の詔勅発布。

昭和12年3月2日（火）

快晴、風強し。庶務長より手紙、田代君持参す。辞表提出方申越しあり。横町君をして調製発送せしむ。昼食の際、江崎、横町、熊本、石原、福田諸氏を前にし、事実を通告せんとせしも言へそびれたり。後刻江崎君を喚び、之を咄す。他には漏らさぬ方よからんと云ふにぞ、夫れに同意せり。出張は差支えなしと電話あり、六日より出発することにせり。逋信局経理課検査係長、前田永次郎氏、外二名臨局。午後二時、切手類の検査を終え、傭人宿直室にて検査初む。此日中学、商業両校服務。四八聯隊歩兵少佐徒出、勲五渡辺久寿吉、昨日陸軍大異動にて聯隊副官となり、満州に出発する由にて挨拶に見ゆ。後任、少佐寺町俊一氏。五時四十五分検査員を置いて飯宅、子供等に退官を通告す。夜七時半、飛行機の石井忠夫氏来宅。一時間程色々咄して飯らる。鳥瞰唐津絵葉書七枚一組物、賜はる氏は西寺町に居住さる。三時半頃より曇り、六時頃は降り出さし模様なり。夜降雨。

昭和12年3月3日（水）

朝降雨、洋傘さしかけて行く。出張員九時半頃臨局、昨日に引続き検査。午後より雨歇む。寺島後藤寺局長、見学出張、十日頃臨局の旨通知越さる。後藤寺の川崎勲君、小包受取りの返事を佐賀城内と記載し、佐賀局集配手を面喰らわす。五時四十分帰宅。八時前入浴。

昭和12年3月4日（木）

夜半より降雨、五時頃より風強し。出勤時、洋傘持参。十時頃より次第に歇む。午後は漸次霽れ、快晴を見る。一時気温低下せしも戸外は暖かかりし。女学校より志願者十名程、成績表と共に履歴書回付あり。中には成績不良の者数名あり。事務員志願者より、交換の方は低級にて可なるやの思想を抱懐する弊あり。是正の要を感じ、校長に電話せしも生憎不在、代理者に一応話し置けり。明日の座談会に松下谷一氏臨局模様。今日問題、佐賀局気付けにて返付置きたり。猶余より数問を提出したり。五時四十五分帰宅。局より余の品物、一抱えつつ持参することとせり。澄子に理髪頼み、髯剃る。公園彼岸桜の咲く。東京増田翠子氏よりの書面には、上野の彼岸桜は既に満開とあり。半月位早く咲くらし。

昭和12年3月5日（金）

快晴、珍らしき日本晴れ。午後、渡辺少佐自宅を坊主町に訪ふ。女学校の向い側に尋ね得たり。若き妻女出でて挨拶あり。八日に出発する由。御見送り出来ぬを詫び、直に駅に赴く。初めての路線を辿りし為、時間を費やし、桂樹先生の到着を途中に迎ふことになる。横町君独り

出て居る。松下君にも労を犒（ねぎら）ひ、直に新岩井屋に案内す。三時を報ず。余は横町君の飯った後、宗教上の問題に就き悩める例を陳（の）べて、先生の意見を徴す。余の意見に同（どう）じ居らる。三時半帰局。五時二十分前臨局、定時開会。先生の講演二時間を過ぐ。別に甚だ感激したることなし。当局より提出の問題七八問は、七時半より約一時間。而して其の問題も横町君一、他の皆、余の立案に成る。夫れを謄写版にし全員に配布せり。熊本電話の一員より提出の、醜女なるが故に貰ひ手なしとの深刻の悩みに就いて、講師たる田村団長は、精神の平和は容貌をも或程度換え得る理由を話して慰謝されしも、夫れ等、生優しい答弁では承知せず、世間の男子は見方を改むる必要ありと叫びたりとか。当局は頗る穏やかに終始し、九時一寸前閉会。余は明日より出張することを誥（つ）げ、飯宅して夕食を済まし、入浴して十時過ぎ寢床。

昭和12年3月6日（土）

昨の快晴に似ず朝来曇り、今にも降り相の空模様。午前八時二十七分発の列車、佐世保まで1, 49銭切符を求め乗車。途中降雨。久保田にて分岐（ぶんき）、佐賀往復を車掌に依頼、22銭。十時佐賀着。駅前市内図により局舎位置を探り、徒歩、局に至る。少時公衆溜りに休憩。案内係の側に居り、窓口応対振り、案内係活動模様を注視す。夫れより裏に廻り、庶務課長荒木忠夫氏に面接。局長萩氏は市外巡視不在。茲（ここ）にて内田君に会ふ。次いで郵便課長井上宗八氏に案内。恰度明日、通信総合競技会三等、局側の開催準備として局長会長及び副会長臨局の由。田代氏に面接せしも、伊藤会長には会迄（か

いこう) せざりし。正午に引揚げ雨の中を駅に向かふ。一時何分かの汽車にて、一路佐世保に向かふ。途中、武雄附近にて未倉様に遭ふ、巖木に至り販る処なりと。三時過ぎ到着。降雨の為、道路泥濘。バスにて10銭、常磐町角に下車。店に寿夫居る。使用人と思い、挨拶もせず家に入る。直に三階に上がり、此日は雨天の為外出せず。十時頃光子も来たり。二郎の問題にて咄す。十二時近く寢床。

昭和12年3月7日 (日)

朝来晴天、五時近く目覚む。誰も起きず七時半頃、漸く起床。朝食随って遅延、九時半出局。郵便主事井上、山口両氏の案内にて色々承り、電信課に案内され、正午近く販る。次いで昌江と墓詣でに行く。昌江フロックをモーニングに改造せしやにて、其の服を一着に及びて出発す。墓所は前後に堂々たる自然磨石を供え、中には小家屋を建造したるあり。何れも千円以上を技したる大工事なりと思わる。此夜復た酒を恵まれ、松原氏より酒代の寄贈あり。最初一時間ばかり昌江と酒を汲み、階下に至りて高塚春一の子供数人と御飯中の列に加わり、余も鯉(にしん)の乾物にて夕食の馳走に預かる。米倉氏を正午招待、お祭りをして貰ふ。同氏を正賓に馳走したるなり。夕食後は玉屋デパートに行き、折柄陳列の宮本武蔵展を観る。八時頃販る。風甚だ寒し。十時前二階に床を延べ休む。然るに風呂が沸きしと云ふにぞ、再び入浴、髭剃る。松原氏の席は芸妓来たり益々賑わふ。自分の事務所に引揚げて、余を三階に寝かす。二階は水兵さん寝て居る。芸妓は昵懇の間柄にある者なりと、三月雛祭りにも人形を寄贈せりなどの咄あり。雛段は立派に取付

けあり。別に等身大の人形も飾られあるを見る。反物類の寄贈多し。此日の母の祭紀の為、昌江に二円を謝礼せしめ十円交付す。猶雛祭りは文夫の長女の初雛にて、妻の里親より寄贈の人形を基に、取纏めしものの由。御殿風の立派なものなり。

昭和12年3月8日（月）

薄曇り。早く起床、下にて朝食を済ます。子供二人、慶子二年、昌光五年と云ふ。八時五十分頃出発。松原氏よりカステラ土産に頂く。文夫、余を送りて自動車、西肥停留所に至る。九時三十分発平戸へ1, 20銭、汽船賃も加味されあり。但し航路は拾銭とす。十一時十分頃、田平に着。平戸口とも謂ふ。恰も平戸行荷役船の出帆する際とて、此の船に乗せて貰ふ。十五分にて平戸に着す。局は天満宮参道の傍らにあり。綺麗に掃除しあるが特色とも覚ゆ。老通信手、藤谷久次郎氏と会談す。局内を巡りて二時過ぎ、局長身送りの下に乗船す。平戸口発、四時四十分有田行き列車は、伊万里着六時三十三分、北九州鉄道伊万里発、六時十二分に間に合わず。遂に田平より今福までバス60銭で、四十分程待合わせ、三時十分発にて今福に向かふ。此の間平戸より再び着船あり。其の客を収容して出発す。今福は海岸の小港なり。五時十分発まで四十分待つ。定時に五分遅れ、大急ぎにて六時十分到着。バス代40銭、伊万里東唐津間は75銭。七時着渡船にて5銭。饅頭30銭土産、八時到着、夕食。小倉先生より、親戚の某三等局長に再婚の人、前妻に二人の子供ありと云ふ。生活の安定には申分なしと認むるも、虚栄心強き道子には承諾せざるべし。先日歌会に出福せしも、其の問題を独自の意見にて解決を期せんとする底

意と思料す。

昭和12年3月9日（火）

快晴。午前中家に居り午後出局。一円にて果物を買わせ馳走す。明日の見習試験の問題を、謄写版刷りに橋本君を当てしむ。本省電話係、中村嘉三氏福岡より臨局に付き、石原君迎えに行く。五時四十分帰宅。山口主事補、結婚辞職申出あり。六年に満たず任官不能の由。夜八時、相談所小使い大島来宅。娘の受験に付き頼みに来たりしものなり。九重を出し菓子を遣わす。出局に外套を着せざりしも夜は冷ゆ。風呂沸き入浴。

昭和12年3月10日（水）

曇り、雨模様。後降雨の予想と放送あり。洋傘持参。此日、見習採用試験応募者四十八名中、四名不来。商工会議所にて試験す。石原主事、秋山主事補、横町主事、橋本書記補、余説明し一時間半。算術答案の採点に着手。午後一時より国語試験の際も、余より説明す。雨漸く繁し、午後四時終了。国語採点遅々として進行せず。午後六時十分までに、僅かに拾名を済ましたるに過ぎず。二十分帰る、雨盛んに降る。

昭和12年3月11日（木）

朝五時、北の風次第に強風程度に吹捲く。和傘持参、春コートを着用出勤す。風雨歇まず。伊藤名護屋局長臨局。保険成績を管内一位に押進むる為、標語を書き、之を印刷屋を呼んで印刷に附さる。猶、一類成績優良七十局より抽籤にて、二局を見学出張せしむることとし、相知局長を呼寄せらる。満島局長も来局。昼食を済まして満島は

飯り、二時頃伊藤氏飯り、次いで相知、佐伯氏、例の結婚媒介問題に付き色々話あり。余の家に立寄らるる筈なりしも、この次の機会に譲り飯らる。以て中尾さん、橋本氏の案内にて挨拶に来らる。これ亦色々身上咄あり。三十分間程咄して、庶務の茶話会に臨席さる。国語の採点終わりしは六時近し。作文を十番まで済まして六時過ぎ帰る。雨歇みたるも風収まらず、冷氣強し。八時頃中島氏より電話。寺島後藤寺局長、七時過ぎ臨局、新岩井屋に泊まると。

昭和12年3月12日（金）

雨繁し。予報は後霽れるとあるも、九時頃までは降り続き次第に歇む。正午頃多少驟雨、後全く霧。寺島局長十時頃臨局。正午対岸の西洋料理に行く。江崎、中島、石原、福田、余と計六名、二時飯る。後藤氏選挙取締に臨局の由。寺島氏は良く饒舌す、咄は容易に尽きず。三時飯途に就く。バス路まで八島監視員に送らす。見習採用試験作文の採点を終わり、十二名を合格とす。此日、電話山口はつえ氏、退職送別会開催。氏は飯塚忠隈炭坑に行く由。六時飯る。後藤氏は三時近く新岩井屋に泊まる。夜飯を食わず鶏卵一ヶすすする。二郎より手紙、道子宛て到着。女中小母さんを連れ来たりしも飯らせ、此の間種々世話になりしと云ふ。世帯持ちてよろし、誰か来て呉れとあり。

昭和12年3月13日（土）

快晴。有浦局長臨局。自分推薦の見習、選に漏れしに對し頼みに来たりしもの。成績を見れば十二名内に当然入選資格あるを発見し、追加することにせり。乃ち当局

の遺漏に基因するもの。昨夜推薦状多数差出し、本朝高串へ逡送の処、本朝の配達に結束困難の旨、来照越したるに対し、後藤出張員に質したるに、総動員しても配達を了せしむべき旨、申渡されし由。其の為か本日の日程を変更して、勿皇高串に向かわれし由。所得税申告期間切迫したるを以て調製、午後二時頃発送せり。山口主事補の後任銓衡せしが、秋山松下氏等、坂本はるみを希望せず坂本よしみを推薦せり。試験の結果中里氏成績良好なるも、伎倆の点未だしとの注意もあり、推薦の人物を採用することにせり。六時半眠る。此夜、川添事務員の母堂来宅。同氏の妹、高女卒業落選に対し、是れ亦頼みに来たりしもの。成績を見たる上判断すべしと答え置けり。昨夜寝不足、脚部冷えたるが原因と認め、此夜は懐炉灰を焚き暖を採る。米沢局、齊藤寅松六等五級退職発表。放送局開田源屋氏、本夜、近松座にてトーキーの夕を催すので、敬意を表すべく東邦電力社員と臨局。福岡大工町局長、上妻作次郎氏長女死去の旨、通知あり。電報にて哀悼の意を表し置けり。

昭和12年3月14日（日）

曇り時々霽れ、又午後降雨あり。朝より今回出張の復命書作成に費やせり。昌江より催促の駒次への預け金証拠書を整理し、松原氏に手紙出したり。有浦局長来邸、土産持参に付き返戻せり。一時間ばかり之が為に徒費せり。十時再び入浴。此日冷氣、電気蒲団用ゆ。

昭和12年3月15日（月）

曇り、四時頃より降雨。福田君より集配手妹某の為に懇願越せり。次いで市内某氏も来たり。別の人物の為に運

動す。何れも懇示置きたり。呼子の坂巻氏の転居問題も庶務主事に注意。同氏より坂巻を招き内容を尋ね、再び余に調査の結果を通告せり。然るに此夜同女父親、態々同女を連れて来邸。事情を陳述せることは頗る恐縮せり。大阪中央郵便局長、進藤恵順氏、退職の広報を見る。猶、大分局郵便課長も同断。

昭和12年3月16日（火）

大体晴れ。此朝八時十分、既に小学卒業生、見習採用試験口頭試問に応ずる為来局。女学校卒業式後、午後一時、女学校組は来着す。五名を不合格とし他に五名を追加す。六時半帰る。官舎の前の雑貨店主人の妻五十歳、今朝癌にて死去。五時余が既に起き出でたる頃、井水を汲上げ居るを不思議に感じ居れり。澄子が起き門扉を開き、此の事を知り逸散に走り来れるを見て、慌ただしき態度を詰りしに事実を語す。昨夜電話を借りに来たりしも、医を招く為なりしと云ふ。保険契約し居れりとのことに出局。訪問せしめたるに、受取人を指定し居らず。即時払い出来ぬ由なり。昨夜、坂巻より黒鯛一尾持参あり。料理して夜の食膳に供し余も之を戴く。猶隣家の不幸に対し線香と蠟燭を持参、弔意を表し来れりと云ふ。日中暖かなりし。ラジオ低音、成るべく洩れざる様注意せしむ。本日焼場にて骨にして来れりと云ふ。葬式も今日済ませるものの如し。

昭和12年3月17日（水）

晴天なるも冷氣。午前中、元門司局外郵に居りしと云ふ江崎氏、昨年十月保険課に在勤、今日佐賀に行くとして臨局せり。上原の話をなし居れり。午後、昨日召喚の四名

補充員出頭。医師に遣り次いで口頭試問す。殆ど全部採用のことにせり。本日監視員をして、見習試験合格者の身元調査をなさしむ。四時頃より冷氣甚だし。ストーブは消火し盡（つく）したる為なり。中尾氏、本日十時出發せし由。

昭和12年3月18日（木）

午前中晴れ、次第に不良となりたり。中山次雄氏、佐世保出張辞令来る。曩（さき）に事務員一名の出張方電報あり。該当者なかりし為、断らんとする案に対し、電話にて書記補にては如何かを尋ね、差支えなき旨の回答を得て同氏を選出せしもの。本日勤債売出。澄子要求もあり拾枚遣わし、他に五枚を融通し貰ひ、之を広瀬米一氏に送ることとせり。自分のみ満足し他人を満たさざること、心に咎むる処あり。電報にて同氏に通知し置きたり。澄子よりは百円貯金即時払いす。広瀬氏分は余立換ふ。此日は五時前帰宅。夜八時半、有浦局長菊水に居り、多分保険の江崎氏と後藤氏とを招き酒宴を開き居る如し。余の参加を求め来る。余之を辞退するに、来客の口実を以てす。選挙の終日酒飲みなど、大いに慎しむ要あるべし。殊に余は、有浦局長推薦の人物を採用せざることとしたる為、猶要求に応じ能わぬものとす。橋本君ラジオ取締の為、市外に日帰り。三日間出張の初日は一名の盗聴発見。此日にて二日目、発見不能の由。

昭和12年3月19日（金）

午前曇り、霧かかり居り。八時仕度をして居りし時、電話あり。後藤書記二十七分出發すと云ふ。余一旦出局し鞆を置いて駅に行く。猶十余分を剩す。後藤氏既に在り、

新聞を読み居る。挨拶して入場券を求め発車を送る。本省経理局、安東胤男氏臨局。分室敷地を見聞して昼飯を済まして、横町君東唐津駅に送る。伊万里を経、長崎に赴く由。本日見習身元調査を了し、十二名に対し二十日出頭を通知す。母姉の同伴を求む。相談所事業周知に付き、金二十八円要求書作成提出す。午後四時降雨、夜に入りて歇まず。近藤恵順様より退職挨拶来る。当分京都に居住の由。県会議員投票八時、既に市役所は投票者にて相当賑わえり。定員一名に対し、政友清水氏（市会議長）民政富永氏（市議）木村氏（無産市議）にて、文書戦は清水氏に応援多く、言論は富永氏に聴衆集まると云ふ。ヤップ広セ氏、二百円電為替にて送金越せり。五枚五十円に対し誠に当惑せり。夫れは多数購買を諷する積もりかも知れぬとの思念もありてなり。明日振替にて返金することにせり。為替料割安を以てなり。

昭和12年3月20日（土）

朝七時半朝食の際、有浦局長、宮崎氏来邸。同氏推薦の人物は遂に之を採用せぬこととし、昨日人選を決定したりし折柄とて、家庭の事情を顧みるに思わしからぬ節ありたれば、見合わすとしたるもあり。或いは不合格中にありしやも知れずと挨拶し置き、曖昧に濁したり。朝より降雨。昌江出て書留の配達を受く。高羽駒次への債権を内容証明にて通知せしもの、合計金四千貳百参拾壹円。而して昭和六年二月五日付き報告書に依る。昭和五年十二月末日までの元利金は、金二千六百十四円四十銭にして、爾後八分の複利にて、昭和十二年三月末日までに前記金額に達するものなり。此日債券五枚、書留にて広瀬米一氏宛て発送す。昌江にも其の俣書類の写しを保存し、

書留にて返付せり。午後五時二十分土曜会。第二土曜日は選挙の為、集会を遠慮。愈々開票も済み勝敗の数判明せしかば、本日を以て例会を催せしもの。会場自由亭洋食。西山市長、萩谷助役、参加十八名に過ぎず。八時帰宅。猶多少驟雨、風強し。入浴。新聞を見、十時過ぎ寢床。津田基次氏退官発表。

昭和12年3月21日（日）

晴天なるも北風強し。例により掃除丹念になし、ラジオと併せて体操を済ませて行事を営み、八時過ぎ朝食カレーライス。久子桜餅求めて来たり。余にも持来たる。之を夕食時まで食わず。食事時パン蒸し、同時に摂取。今日手紙書き、各方面より貰ひしに対し返信す。鶏卵二錢八厘にて二十ヶ求め、封筒二十枚十錢にて久子に買わす。夕方に至り風漸く収まる、気温は可なり低く、電気蒲団を使用す。

昭和12年3月22日（月）

朝より快晴、雲翳を見ず。見習十二名、母姉同伴にて出局。集配手宿直室にて辞令交付、余より訓話。講師紹介、次いで座談会を催し十時閉会。五時過ぎ退局。夜監督課人事係長より電話あり。長崎島原方面にありと云ふも断り置けり。差当たり福岡には空きなしと云ふ。

昭和12年3月23日（火）

青年学校卒業式、見習中四名の出身者あり。午後一時まで出勤を促して参列せしむ。一時迄に来局せしもの三人、他の一名は四年卒業。色々送別会等の外、謝恩会の催しもありて三十分遅れて来る。一時三十分より服務、一

時間半を費やし三時終了。此日朝の間曇り、九時頃より降雨。四時半昌江来る。二郎も来たりし由。鹿児島行き社名に依ると云ふ。二郎は官舎に昌江は余の許に、而して大原を訪ふて解決を迫る。大原は総て二郎の遣り口を知る。静江氏二郎を慕ひて、破談を肯（がえん）せずと云ふ。

昭和12年3月24日（水）

朝の間曇り、漸次霽れ。昨六時、坂梨君熊本より販来、官舎に立寄る。恰度昌江と一緒に販りしと同時刻なりし。玄関先にて話し、座敷に請したるも上がらざりし。夜活動映画試写、余不参。さて本朝昌江、余に金を百円借せと云ふ。二郎結婚費用なり。余絶対之を承認せず。二郎会社を辞するや、給料の三ヶ月分を退職手当として貰ひし由。夫れを悉く使い果たして、結婚費用を余に仰ぐことは承服し難し。昌江は自分が借りるなりと弁解するも、勿論用途は明白なり。断乎交付せず。如何なる措置を採りしや、余は之を知らず。此日午後一時半、萩佐賀局長臨局。四時半まで居る。余之を導き、丸ビルにて夕食を馳走す。4,30支払ふ。棒給下渡。見習に対する服務は昨日より初む。昌江は十時頃、二郎は十一時近く去る。二郎は鹿児島に行きし由なり、或いは鹿児島より販るさ挙ぐるやなるも、如何にする積もりなるやを知らず。

昭和12年3月25日（木）

珍しく粉雪ちらつき、近所の山岳、白皚々（がいがい）たり。三時名護屋局長臨局。前夜、武雄にて佐賀局長と泊まり合わせ、唐津に行くこととなり居ると云ふ。伊藤氏は小城郡内各局監察せし由にて、武雄を中央に活動せし

趣なり。五時二十分飯宅。夜秀夫より電話。適當の家見
当たらず、明日来たれと云ふ。

昭和12年3月26日（金）

朝余りの寒さ不退、曇り次第に霽れ初む。不思議に鞆を
忘れて出発。思い出したるも引返す煩わしさに出局。朝
二郎の婚礼に余の羽織袴を借すことを表面拒む。大人気
なきことながら、文句を並べて二十五分頃出発せり。十
一時頃電報。余、任高等官依願免発令、江崎書記心得
を命ぜらると。仍って机を整理し、午餐を済まして帰宅。
夜山口主事補、明日午後四時五十分出発の旨、挨拶に
来る。同時に黒岩君と庶務の永富君と来邸。永富君昨夜、
夢に余の退官を知り、今朝庶務にて咄し実を得、一同驚
くと。次いで田代主事来邸。一時間余、一緒に飯れり。
今夜公会堂にて映写会、逓信局より出張員二名来局せる
由。此日、余飯るさ市長に会ふ。退職の旨咄す。品物整
理、不要物を風呂焚きとし早くより沸かす。天気快晴。
夜は少々寒し。

昭和12年3月27日（土）

定時出局、快晴。九時集配手に挨拶、次いで見習に挨
拶。次いで局長室に集合の吏員に別離の挨拶を陳べ、
江崎主事答辞。九時五十分写真撮影。十時庶務一同と
局長室にて写真を撮る。十時半自動車、横町君便乗一巡
す。午後二時を過ぐ。飯るさ菊池氏を中央市場に訪ふて、
名刺を出し飯宅。午後四時二十分、和服にトンビ着て唐
津駅に至る。山口氏の盛装の姿、少時して自動車より表
わる。局の同僚五六名も来る。四時五十分石原主事さん
も見え、秋山、森田、松下の幹部も見ゆ。四時五十九

分発車、二等車に乗込む。巖木にて式を挙ぐるらし。此日、自動車代として横町君に拾円附託す。明日梱包に局より人を派遣する由なり。午後より次第に、天気落ち目となる。昨今玄米食。

昭和12年3月28日（日）

朝より橋本君来宅。横町君も来たり、北野君も来る。行李梱包す。余十時十分頃、衛藤福日記者を東唐津に送るべく、渡舟場に行く。此処の渡船の受負いをなし居る電話事務員は、曩（さき）に蛸（かき）を持参せし者。色々深切に咄し呉る。渡船到着、余一人乗る。駅着四十五分、猶十分を剰す。衛藤氏に挨拶入場券を求めホームに出づ。十一時を過ぎて発車す。車内混雑、満員を超過す。見送る人頗る多し。再び渡船販る。昼食を二人前注文す。横町君、子供独り取残し居るとて一旦販る。北野君のみ午餐を餐し販宅、何か土産持参。高木先生、佐賀成和高女に教鞭を採り居る人、余の東唐津に行き不在中来邸。道子と公園に行き、余の販宅の際は不在なりし。一時の東唐津発下りにて伊万里に行き、帰佐の予定にて、緩（ゆる）りとして居れずとて、再び立寄らずに販らる。道子送る。橋本君午後來たり手伝う。余、礼に品名を書きなどす。集配手も来る。江崎君を初め各主事、熊本君と午後一時頃来邸。余の為に餞別を持参さる。局員一同より募集されしもの。後にて見るに金五拾円あり、過分と思ひぬ。中島、福田両氏のみ居残り手伝ふ。橋本君に高麗焼、電熱器等、中島氏に花籠、福田氏花籠、書籍立て、達磨、南洋人形等、横町氏には置物、支那よりの唐人彫を贈る。五時半終了。夕食を一同に餐す。一人前膳60食事付き、酒四升六円、十七人前とす。此日五時

頃、大竹豊より電話。東京中央郵便局に在勤発令、明日出発すと云ふ。誠に慶祝に堪えずと謂ふも、余は一向に知らざりし。井口祐一氏より葉書あり。聊（いささ）か其の消息を伝ひあるに過ぎず。余の許に来る必要もなきが、詳細経緯を余に通知する義務ありと思ふ。夜二郎より電報あり。中津に居る、明日午後行くと。

昭和12年3月29日（月）

晴なるも薄雲ありて明朗たらず。坊主町、有浦、其の他の三局長来邸。此日郵便料値上げ座談会を、公会堂にて開催。東松浦郡内、局長事務員会合。松崎先生夫人来、黒岩相談所主任来、記念品唐津焼菓子器を下さる。所員一同の志なり。久子をして平塚様へ大竹採用に付き、右の謝電を発送せしむ。「大竹御採用賜わり、本人は更なり、母の喜びし懷（おも）ひ感泣に堪えず、謹（つつし）みて御礼申上ぐ」75銭。印刷物出来、不取敢、一二特三長逓信局係長以上に発送を委嘱す。二郎二時頃来たり。四月四日迄延期出来ぬと云ふ。佐世保に電話するため局まで行きたり。直接後藤寺に電話せよと云ふ。大原へは昌江より電報したるらし。二郎不在中、大原より電話あり。道子応対す。大原は約束だからの一点張りにて承諾せず。余道子の応答振りを齒痒く思ひて、非難したるが原因にて、道子が弁解し、澄子が道子に同情し兩人泣き出す。はては道子より上京、平塚様に身の振り方を協議するからと申出づ。澄子以下も一緒に行くと謂ひ出す。余は今皆出よと大喝す。二郎飛出し来るも対手にせず、諄々説得す。彼等は自己弁護のみにて、毫も謙虚の気持なし。横町君子供が泣き居る際、来邸。出来上がりし印刷物を発送得らるる様にし持参さる。料金を託

し、発送をも頼む。橋本君の筆になり居る如し。夜佐世保より電話、二郎かかる。

昭和12年3月30日（火）

晴れ後曇り。二郎昨夜の電話にて、伯父が立場上四日を短縮不能と謂ひ出し、強請的に四日まで待てと云ふ。応ぜざれば知らぬと電話を切る。何れも対手を思はざる我利思想の表はれなり。此の朝、二郎澄子福岡に行く。昨夕秀夫より、家ありとの電話による。此日硯筆等城内局より借りたまま、昨夜二郎に手伝い書き貰ひし残りを書き、久子をして投函せしむ。

昭和12年3月31日（水）

愈々今朝出発。八時集配手数名、荷物の世話に来たり。九時積込み、小使い二名、橋本君も来たり。トラックに便乗し、二郎指図の為同車先発。余等十時過ぎ出発。余のみ局に行き各部を一巡して挨拶。折柄佐世保より電話あり。大原より抗議ありし為と云ふ。其等に時刻移り、道子と同車し能わず。一時間待つ間、虹ノ松原駅まで徒歩す。然るに通り過ぎて浜崎に出づ。同駅より乗車、矢張り一元を請求さる。東唐津よりの賃銀と同一なり。五分程待合わせて乗車したるが、鳥飼にて下車し、箕島に気付きし時は既に遅し。タクシーにて箕島駅に向かふ。途中二郎よりストップを叫ばれ停車す。トラック挽込み不能、車力にて運搬す。荷物多くして家小なり。全部を外廊に放置し、小使い等解包し、午後三時頃引揚げたる由にて、五円を贈呈せりと二郎の談なり。さて此日汽車中にて、二郎が会社の為に自己の利害を超越して、場合に依りては結婚の解消を辞せざる態度は、詢（まこと）に

見上げたもの。此の気持に刺戟され、余の多年の反対を緩和し、此の縁談の結合に乗り出すべく決意し、二時頃二郎に咄し後藤寺に向かふ。呉服町停留所にて往復バス券1,50円を求め、飯塚にて乗り換え、四時半後藤寺に到着。大原氏を訪ふ。静江さんに会わせて呉れと云ふ。座敷に請せらるる儘上がる。臈（やが）て、髪を高島田に結ひし静江さん出て来る。余は二郎不身持、不都合を並べ、静江氏の意中を質す。或いは呆れて解消せんかとも思ひしに、断然嫁することに変化なしと云ふ。夫れならとて、余自ら解決の意あるを述べたるに、一家愁眉を開き酒肴を整ひ饗応す。六時に出発せねばバスの間に合わぬ惧れあり。急きつつも話に長時間を費やし、大原氏自ら二郎を説服せんと謂わる。余と共に福岡に行くことになり、六時半出発。八時十五分飯塚着。汽車は九時五十五分にて、一時間余り待合ふ要あり。而も十一時過ぎ着にて、肝腎の要件を済まさぬ間に夜明けに近付く惧れあり。タクシー六円にて傭ひ、一時間三十分にて到着。直に二階に二郎をして案内せしめ、秀夫も来たり居り。四日延期を承諾せりとの大原氏の咄に余も満足したるが、二郎が鹿児島に行きし如き事實はなしと云ふ。女中と別府辺に遊び居りたるに非ざるかと思わしめらる。十二時寢床。大原は親戚に行き泊まりしらし。荷物の整理出来ず、茶も出し兼ねたり。八木山の桜花満開に近く、紅白幔幕に囲まれ、酒宴の客幾組か見ゆ。一兩日後には全山、花に包まるる観を呈すべし。遍路大師詣で甚だ多し。